



国民の森林・国有林

中部森林管理局

〒380-8575長野市大字栗田715-5

☎050-3160-6513

http://www.chubu.kokuyurin.go.jp/

広報

中部の森林



伊那谷総合治山 上西さん



森林技術センター 大林さん

審査風景



飛騨高山高校 岡崎さん、祐成さん



会場風景

平成18年度中部森林技術 交流発表会を開催

(P 3に関連記事)

主な項目	<ul style="list-style-type: none"> ○ 木曾谷・神通川・飛騨川3計画区の森林計画等を策定・公表 …P 2～3 ○ 平成18年度中部森林技術交流発表会を開催 …………… P 3～4 ○ 各種授賞式が開催される …………… P 5～6
------	---



この広報誌に使われている紙は、日本の森林を育てるために間伐材を積極的に使用しています。

木曾谷・神通川・飛騨川三計画区の 森林計画等を策定・公表

「計画課」一月十六日、平成十八年度

の樹立作業を進めてきた木曾谷ほか二計画区の森林計画等及び宮・庄川ほか二計画区の変更計画が、公告縦覧による一般の方々への意見聴取や学識経験者による検討会などの手続きを経て、策定・公表されました。

今年度の樹立計画区は、日本三大美林のひとつである木曾ヒノキ林を有する木曾谷森林計画区、雄大な自然環境の保全部や山地災害の防止等が求められる神通川森林計画区及び「東濃松」に代表されるヒノキ人工林地帯となっている飛騨川森林計画区で、各計画区の特質や近年のニーズ等を踏まえ、計画策定に取り組みました。

各計画区の見直しポイントや計画量は



木曾ヒノキ 一斉林

次のとおりとなっています。

木曾谷森林計画区

木曾谷のシンボルともいえる木曾ヒノキ林は、たゆまぬ人為との関わりの中で成立した特異な天然性二次林であり、照度不足や他樹種との競合などにより、自然の推移のままでは次代の木曾ヒノキ林を再形成することができず、将来に向けた木曾ヒノキ林の育成が課題となっています。

次期計画においては、これまで主に取り組んできた択伐（単木型）・漸伐によるヒノキ更新の得失を踏まえ、小面積の孔状伐採と更新補助作業を組み合わせた「群状択伐」方式を主とする更新に取り組むこととし、林内照度の向上や保残木の風倒害等のデメリットを最小限に抑え、更新補助作業が集中的・効果的に行いやすいなどの手法へ見直しを図りました。

これにより、今後の木曾ヒノキ林施策は「群状択伐」によるヒノキ天然更新と、これまで百年以上にわたって施策を続けてきた超長伐期ヒノキ人工林施策による次世代木曾ヒノキ林の育成に取り組んでいくこととしています。

また、計画区南部の南木曾岳一帯を木

曾五木等の「植物群落保護林」に指定し、自然の推移に任せつつ、訪れる皆さんに現在の木曾ヒノキ林を味わっていただく区域としました。

現在は見事な姿を見せてくれる木曾ヒノキ林も、高齢化やヒバ等他樹種への移行は少しずつ確実に進行しています。保護・保全と超長期にわたる次世代林分の育成を図りつつ、現在も将来も木曾ヒノキ林が維持され利用されることを目的として施策等に取り組んでいくこととしています。

◆ 主要計画量等 (単位:ha, m)

	木曾谷		神通川		飛騨川	
	本計画	前計画	本計画	前計画	本計画	前計画
国有林野面積	89,458	89,468	95,424	95,455	23,951	23,961
水士保全林	66,570	65,051	36,888	36,915	20,836	20,845
国土保全タイプ	25,876	23,362	34,828	33,434	5,404	4,287
水源かん養タイプ	40,694	41,689	2,060	3,481	15,432	16,558
森林と人との共生林	19,758	20,669	58,518	58,522	2,320	2,321
自然維持タイプ	15,165	14,648	58,148	58,146	1,663	1,664
森林空間利用タイプ	4,593	6,021	370	376	657	657
資源の循環利用林	3,130	3,748	18	18	795	795
伐採量	510,000	435,095	30,700	33,900	188,000	189,000
うち間伐	370,898	285,080	17,189	20,064	157,151	130,181

神通川森林計画区

国有林野面積の約八割が自然公園に指定されていることや急峻な山岳地帯であることから、計画区の九割以上が自然維持タイプや国土保全タイプの森林となっており、自然環境の維持や山地災害の防止を重視した災害に強い森林づくりを重視していくこととしています。

計画では強度の根曲がりスギの人工林が主体となる区域について、積極的な間伐等を進めながらウダイカンバなどの広葉樹の侵入も期待し、将来の姿を針広混交林において施策を進めていくこととしました。



長棟国有林 スギ人工林



室堂平から立山連峰を望む

飛騨川森林計画区

地形地質等の条件から、国有林野面積の九九パーセントが水源かん養、土砂流出防備等の保安林に指定されていることや、「東濃松」に代表される木材の主要な生産地にあることから、水源かん養・山地災害防止機能を発揮させるため、伐期齢の引き上げや、ヒノキ造林地において、弱度の間伐を短い期間で繰り返して、幹を太くし、根の張った、災害に強い森林づくりに取り組みながら、ヒノキ人工林の積極的な施業を進め、優良ヒノキ等林産物の供給等による地域振興にも資するよう計画の策定を行いました。

森林計画の樹立は、日々の事業実行や地況林況の把握など五年間の実行成果を踏まえた見直しであり、樹立計画に基づきより良い山づくりが、これからも円滑に進むよう取り組んで参ります。



落合国有林 ヒノキ人工林

試験研究・林業体験活動を発表

「指導普及課」二月八日～九日、中部

森林管理局大会議室において、平成十八年度中部森林技術交流発表会を開催しました。

この発表会は、管内各森林管理署等、各県の試験研究機関、大学、高等学校等が、日頃から取り組んでいる森林・林業に関する試験研究、林業体験・ふれあい活動等の取り組みについて発表し、関係者相互の交流を深めるとともに、更なる森林・林業の推進とこれら成果の普及に資することを目的とするもので、各森林管理署等から十二課題（大学生、関係業界等との共同発表三課題含む）、各県（富山、長野、愛知）の研究機関から三課題及び学生から六課題（大学二課題、林業大学校一課題、高等学校三課題）の計二十一課題が発表されました。

一日目は、国有林関係から、ササが深く関わるヒノキ天然更新、路網整備を軸とする低コスト作業システム、戸隠森林植物園に対するアンケート、森林交流館での情報発信、地域と連携した森林環境教育、ニホンジカによる森林被害対策、長年の治山・砂防技術等々幅広い分野の発表があり、各県からは、ツキノワグマによる剥皮被害対策、立木の剥皮による乾燥技術、海洋深層水を利用したキノコ

栽培の発表と信州大学環境ISO委員会の発表が行われました。

二日目は、名古屋大学、長野県林業大学校、飛騨高山高校、上伊那農業高校、木曾山林高校の学生からそれぞれの課題が発表され、二日間の全ての発表が終了しました。

発表終了後、審査委員を代表して植木教授（信州大学）から、今回の発表は、現場密着型の発表に加え、局長が提唱されている「人とのふれあい」など内容が多岐にわたっていることが特徴であり、国有林が大きく社会の流れの中で変化していることが窺われました。この発表会に至るまでには、発表者のみならず多くの方々の支えがあつて発表できたものであり、その努力に敬意を表します。との言葉に始まり個々の発表に対しての講評が述べられました。

その後、計画部長から国有林の部の審査結果が発表され、県からの発表者へ記念品、学生発表者へ局長奨励賞の贈呈を行ったあと優秀賞等の表彰が行われ発表会を終了しました。

今回は、信州大学の学生八名と長野県林業大学の学生及び職員二十三名ら多くの学生等の傍聴もあり、盛大に行われました。

今後、森林・林業の推進と普及に努めていくこととしており、各署等の技術開発への積極的な取り組みをお願いします。

なお、発表者、課題名及び受賞者は次のとおりです。

■国有林の部

◎局長賞 優秀賞

・ササのコントロールによる天然更新について

三村 晴彦（木曾森林管理署）
黒澤 友大（ ）
・地域と連携した環境教育・環境保全の取り組み

大西 沙織（飛騨森林管理署）
上島 弘幸（ ）

◎日本森林技術協会理事長賞

・地域に適応した路網整備を軸とする低コスト作業システムへの取り組み
大林 誠司（森林技術センター）
熊崎 裕文（ ）

◎林野弘済会会長賞

・アルカリ土壌地における緑化伏工技術の確立
上西 美樹（伊那谷総合治山）
林 正裕（ ）

菅井 修一（日本植生（株））
◎局長賞 努力賞
・戸隠森林植物園に対する要請と展望について

吉村 博幸（北信森林管理署）
堀内 志保（ ）
・揖斐川地区民有林直轄治山事業の概成について
萩原 伸也（岐阜森林管理署）

川本 淳 (岐阜森林管理署)
 児波 昌則 (林業土木コンサル)
 ・森林交流館における情報発信・普及啓
 発の取り組み

酒向 篤憲 (愛知森林管理事務所)
 松田 恵 (名古屋事務所)

・白馬岳高山帯の植生復元の取り組み
 井元 幸子 (中信森林管理署)

川田 雄之 (信州大学大学院)
 ・ニホンジカによる森林被害と対策の現
 状について

佐野 智一 (南信森林管理署)
 宮路 聡 ()

・高山植物保護三五年の成果と課題
 寺島 史郎 (富山森林管理署)

・旧御料林における砂防施設の点検調査
 中畑 孝史 (南木曾支署)

・初回間伐から利用可能な除伐二類段階
 での本数調整方法

藤嶋 文博 (森林技術センター)

■民有林の部

・木曾郡南部地域におけるツキノワグマ
 による人工林剥皮被害対策への考察

窪田 達央

・環状剥皮等の乾燥に与える効果について

山本 勝洋

(愛知県森林・林業技術センター)
 ・海洋深層水を利用した食用キノコ生産

高畠 幸司

(富山県林業技術センター)

■学生林の部

・信州大学農学部環境ISO学生委員会
 の間伐材利用活動

古川 久実 (信州大学農学部)

・間伐強度が樹冠の降雨配分に及ぼす影
 響

藤田 裕二 (名古屋大学大学院)

・高性能林業機械体験学習
 高原 将樹 (長野県林業大学校)

目黒 雅大 ()

・地域と取り組む緑化活動

岡崎 俊輔 (飛騨高山高等学校)

祐成 亮一 ()

高橋 和彦 ()

中本 真人 ()

楠 翔太 ()

・インドネシア研修と間伐研修報告

大蔵 大 (上伊那農業高等学校)

西村 臣司 ()

三浦 翔太 ()

杉田 治信 ()

・木炭及び栓皮を培地とした養液栽培の
 研究

下牧 幹 (木曾山林高等学校)

古根 春樹 ()



授賞式前の発表者



信州大学植木教授講評



局長賞 優秀賞を受賞した木曾署 三村さん



局長賞 優秀賞を受賞した飛騨署 大西さん

各種授賞式が 開催される

第三十六回 長野林政記者クラブ賞贈呈式

―三名の受賞者が表彰される―

〔広報室〕二月十五日、長野県内の森林・林業・緑化・木材・特産など幅広い分野において、その振興等に貢献された功労者に対する「長野林政記者クラブ賞」の贈呈式が長野市内で開催されました。今年度は、長野県内の林業関係機関・団体等から推薦された者の中から、三名の受賞者が選ばれました。

贈呈式では、長野林政記者クラブの原田代表幹事（林材建設新聞社）から主催者代表のあいさつがあり、選考経過について報告された後、受賞者に賞状と記念品が贈呈されました。

引き続き、小禄中部森林管理局長、加藤長野県林務部長、大日方長野県林業団体協議会長から受賞者の皆さんの功績を讃える祝辞が述べられました。

受賞された皆さんは次のとおりです。

◎藤原 正人氏

（元南木曾町森林組合代表理事）

昭和四十年に、「南木曾町森林組合理事」に就任され、組合員に造林事業の重

要性を説くとともに自らその推進に努め、森林総合整備事業の導入を図るなど造林意欲の高揚に努め、また、代表理事として新規事業の開拓や組合組織の強化と経営基盤の確立を積極的に取り組み、県下有数の森林組合に育て上げるなど林業事業体の基盤確立に貢献をされた。

◎竹内 尚嗣氏

（元長野県林業労働力確保支援センター雇用改善アドバイザー）

昭和三十六年に、長野県森連に入社し、経理部門一筋に健全経営に貢献し、退職後は、長野県林業開発センターを経て、平成八年に長野県林業財団の長野県林業労働力確保支援センター雇用改善アドバイザーとして、県下の林業事業体に対する雇用管理の改善や新規就業者の円滑化等に精力的に従事され、林業就労者の雇用確保等に多大な貢献をされた。

◎松本 義春氏

（素材生産業）

昭和三十三年に岩倉木材に入社以来、素材生産業務に従事し、知識・技術を研鑽し、家業の松本林業を経て共成木材に勤め、平成六年に北信木材生産センターの設立に伴い、高性能林業機械のオペレーターとして卓越した技術を駆使し、同センターの技能職員として若手職員の育成指導に貢献し、特に機械化による生産コスト軽減のため安全で使いやすい作業路網の開設計術は高く評価された。



受賞された松本氏・竹内氏・藤原氏

平成十八年度 治山・林道工事コンクリールの表彰式

〔森林整備課・治山課〕平成十八年度治山・林道工事コンクリール表彰式を、二月十六日中部森林管理局において開催しました。

このコンクリールは、治山工事及び林道工事の適正化並びに施工技術の向上について関係者の意欲の高揚を図り、併せて設計技術の向上に資することを目的に実施しています。

平成十七年度に中部森林管理局管内で実行した治山工事百五十五件、林道工事十八件の工事を対象に審査を行い、治山部門で十六件、林道部門で六件を優秀工事として選定し、この中から、最優秀工事として治山部門・林道部門のそれぞれ

二件を林野庁へ上申した結果、林野庁長官賞を受賞しました。

また、これ以外の治山部門の十四件、林道部門の四件については中部森林管理局長賞の受賞となりました。

十六日の表彰式は、旧中部局管内の受賞者に対し行われ、瀬戸口森林整備部長から審査報告があり、その後小禄局長から表彰状が手渡されました。

また、旧名古屋管内の受賞者に対する表彰伝達式は二月十九日に名古屋市内で行われ、矢内次長からそれぞれ表彰状が手渡されました。

なお、林野庁長官賞の授与式は、局長表彰に先立ち、二月十三日東京において行われました。

各賞の受賞者は次のとおりです。

●旧中部森林管理局管内

〔治山工事部門〕

◎林野庁長官賞

◇奥田工業株式会社

工事名 荻原沢治山施設災害復旧工事

◎中部森林管理局長賞

◇マツナガ建設株式会社

工事名 米子川二復旧治山工事

◎林野庁長官賞

◇木下建工株式会社

工事名 初谷沢復旧治山工事

◎中部森林管理局長賞

◇藤森土木建設株式会社

（諏訪市）

工事名 北ノ沢復旧治山工事

〈南信署〉

◇大林工業株式会社

工事名 下押出沢復旧治山工事

〈木曽町〉

◇有限会社土生都組

工事名 小タル沢復旧治山工事

〈南木曽町〉

◇吉川建設株式会社

工事名 小塩(Ⅱ)地すべり防止工事

〈飯田市〉

◇富貴屋建設株式会社

工事名 地獄谷復旧治山工事

〈伊那谷総治〉

〔林道工事部門〕

◎林野庁長官賞

◇木曾土建工業株式会社

工事名 尾頭沢池の沢連絡林道新設工事

〈木祖村〉

◎中部森林管理局局長賞

◇川瀬建設株式会社

工事名 奈川黒川林道新設工事

〈松本市〉

◇株式会社新宅組

工事名 黒石林道新設工事

〈木曽署〉

●旧名土屋分局管内

〔治山工事部門〕

◎林野庁長官賞

◇株式会社長瀬土建

〈高山市〉

工事名 鎌ヶ峰(本谷)施設災害復旧治山工事

〈飛騨署〉

◎中部森林管理局局長賞

◇中越興業株式会社・宮口建設株式会社

経常建設共同企業体

工事名 小又川災害関連連緊急治山工事

〈富山署〉

◇ナガイ株式会社

工事名 野麦(日影沢)復旧治山工事

〈高山市〉

◇株式会社柳組

工事名 上小鳥(長谷)復旧治山工事

〈飛騨署〉

◇岩佐土木株式会社

工事名 若栃(日面谷)復旧治山工事

〈下呂市〉

◇大宗土建株式会社

工事名 湯舟沢(ゾーレ沢)災害関連緊急治山工事

〈東濃署〉

◇株式会社阿佐木建設

工事名 上矢作(フタセ)奥地保安林保全緊急対策工事

〈東濃署〉

◇株式会社杉田組

工事名 段戸(本谷)復旧治山工事

〈豊田市〉

〔林道工事部門〕

◎林野庁長官賞

◇中島・付知経常建設共同企業体

〈中津川市〉

工事名 西股(木曾越資材運搬路新設)

その二) 復旧治山工事

〈東濃署〉



各賞を受賞されたみなさん

第三回アンケートの実施

私たちの暮らしを守るために特に必要な役割を果たしている森林は「保安林」に指定されており、中部森林管理局では、そのような「保安林」に於いて森林整備や治山事業等を行っています。こうしたことから、今回のアンケートでは「保安林」をテーマにしました。その結果は次の通りです。

問 保安林制度についてご存じでしたか。

回答 知っていた 十人

知らなく知っていた 十三人

知らなかった 七人

問 保安林制度に基づき、治山事業が実施されていることをご存じでしたか。

回答 知っていた 八人

なんとなく知っていた 十二人

知らなかった 十人

問 今後、保安林の取り組みで特に重要なことはどのようなことだと思いますか。

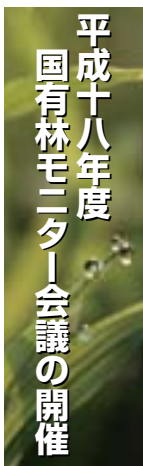
回答(複数回答) 保安林指定の拡充 十五人

荒廃森林の復旧 二十六人

森林整備の充実 十九人

国有林モニター会議の開催

モニターの皆様から直接ご意見を伺うため、平成十九年二月五日、森林管理局に於いて国有林モニター会議を開催しま



〔企画調整室〕開かれた「国民の森林」の実現に向けた取り組みの一つとして国有林モニターを実施しているところですが、昨年十二月に実施したモニターへの第三回アンケートの結果と局で開催したモニター会議の概要を紹介します。

した。会議には管内各地から十名のモニターの皆様に出席頂き、当局からは局長、各部長、関係課長が出席しました。

会議では、当局の事業概要等の紹介を行った後、出席者との意見交換を行いました。出席者からは、「国有林モニターに参加して局のホームページを見たりして、森林の大切さがだんだんと分かるようになった。」「国有林モニターになるまでは森林への関心は低かったが、今では新聞に森林に関する記事が多いことに気づくようになった。」等の国有林モニターになってからの感想や「花粉症の原因となっているスギやヒノキを花粉の飛ばない木に植え換えることはできないのか。」等の質問のほか、「PR資料をもっと一般の人が見られるようにしてはどうか。」等の提案など、様々な発言がありました。



熱心な意見交換の場となったモニター会議

今年度実施した三回のアンケートの回答やモニター会議を通じて頂いたご意見、ご要望は、今後の国有林の管理経営に役立てていくことにしています。

各地からのたより

チップ法面保護工法の 実演会を開催 （末木枝条等の有効利用）

「南木曾支署」十二月六日、北蘭国有林において、末木枝条を利用したウッドチップの法面保護工の実演会を、長野県と連携して実施しました。

この工法は、長野県が「間伐材等の有効利用」を促進することを目的として購入した「自走式破砕機」と「吹付機」を活用し、これまで利用されていなかった末木枝条等をチップ化して法面保護工に使うというものです。

当日は、局署職員をはじめ、地元南木曾町や長野県林業大学校関係者ら約七十人が参集し、珍しい機械の性能や仕組み、有効な活用方法などについて活発な質疑や意見交換が行われました。

これまで、素材生産に伴い発生する末木枝条については、効率的な作業や河川への流出防止などの観点から、その有効利用が模索されており、今回の試みは、この問題の解決へ向け、一つの方向を示したものとなったと思っています。

長野県では、今後、これらの機械を市町村等に貸し出すこととしており、これまで林内に放置されてきた間伐材や末木枝条の有効利用が図られることを期待しています。



のり面吹付けの様子



末木枝条を処理する破砕機

環境問題を考える

「名古屋事務所」二月二日、名古屋市立「はとり中学」一年生九名が、総合的な学習で取り組んでいる「福祉と環境」について名古屋事務所を訪れ森林と環境問題について学んで行きました。

はじめに、森林の機能や、必要性について、パワーポイントを使って説明し、その後、生徒から森林破壊の現状や、森林を増やすために私たちにできることは何かなどの質問について話しました。



森林と環境問題を学んだ はとり中学校

富山森林管理署新庁舎完成

「富山署」富山市黒崎地区において、平成十八年八月十八日に着手した庁舎新築工事が十九年一月三十日に完成しました。場所は富山インター南西へ五〇〇以上の準工業地域です。

新庁舎は、「人と環境に優しい木材の特性を生かした建物。」であること、「富山県全域及び国有林を管轄する森林管理署としてふさわしい伝統的な建築様式であること。」を基本的なコンセプトとした建物でPR看板を設置し、フェア・ウッド利用促進工事として実施し、使用木材を持続可能な森林経営から生産された合法証明木材を使用した、富山県では初めての建物です。下図のとおりPRパネルを作成して、東京で開催されたエコプロダクツ展に展示されました。

延べ床面積は四百六十一平方メートル、使用木材は約百四十立方メートル。スギは富山県産、ヒノキは岐阜県産、カラマツ集成材・フローリングは北海道産で、柱はヒノキ、太い梁はカラマツの集成材で、フローリング等を除けば県内産のスギを使用しています。

一階は会議室・書庫・休憩室・倉庫・トイレで、立山連峰の雄大な景観が見られるよう二階が事務室・署長室になっています。

外観正面は大きな切妻を見せる富山県



完成した富山署新庁舎



富山署新築計画

の伝統的民家のアズマダチ作りとなっており事務室の天井は高くスギ材で組んだ合掌が見えるのが特徴で、道路に面した東側には富山森林管理署と緑色で書かれた看板が光っています。職員一同、心を新たに、新庁舎が地域の森林・林業振興の拠点として、県民が環境にやさしく安心して暮らせる県土の確立を目指して関係機関並びに地域との連携を図り業務運営を推進していきたいと思えます。

分収造林事業協力者 下呂市長に農林水産大臣感謝状

「岐阜署」国有林野の分収造林事業に協力した者に贈られる農林水産大臣感謝状が、二月十四日に岐阜森林管理署長から山田良司下呂市長に伝達されました。

この表彰は、下呂市長（旧小坂町長、旧馬瀬村長）が、昭和五十二年から平成十四年まで継続的に分収造林契約（二十九箇所、七六、六二〇畝）を締結し、造林・育林作業等を計画的に実行し、同時に住民の参加で森林の重要性の普及啓発に大きく貢献し、他の分収造林契約者の模範となる造林地の育成に努めてきたことが評価されたものです。

山田市長は「下呂市で行われた昨年の全国植樹祭を契機に、森林に対する市民の関心が高まっているときに、大変立派な賞を頂き感謝します。この賞は先人の努力の中で頂いたものと思います。今後森林育成に努力していきます。」と感想を述べられました。



賞状を手山田市長と加藤署長

山での間伐を視察 「民有林・国有林が連携した 現地検討会開催」

「飛騨署」当署では民有林との連携として、県飛騨農林事務所と共催した行事に取り組んでおり、今回は上小鳥国有林において冬山の間伐作業地における高性能林業機械を使用した低コスト作業を、また、飛騨高山森林組合木材製品流通センターにおいて新生産システムの取り組みをテーマに二月九日高山市、飛騨市及び白川村の林務担当並びに岐阜県森林整備課技術支援担当職員ら二十名が参加し実施しました。

低コスト作業の現地では、請負事業者から「今までの作業では搬出コスト面で山に放置していた小径木も高性能林業機械の活用により木材として利用できるようになったし、より安全な作業となった。」といった説明がありました。

前日に新規導入されたハーベスターによる伐倒・造材作業も実施されており、参加者の関心を集めていました。

また、新生産システムの木材加工場（木材製品流通センター）では、最新鋭の製材機、木材性能試験器、廃材利用の乾燥施設等を見学しました。

このシステムを軌道に乗せるには、原木の安定供給を図ることが重要な課題となっており、低コスト作業システムによる間伐の推進を始めとして、さらに民有



検討会の様子

林・国有林が連携して取り組むことの必要性を話し合いました。

シリーズ9

実験林・試験地等紹介



「森林技術センター」収穫試験地は、全国各地に約一九〇箇所設定され、林分の生長と収穫に関する統計資料の収集、

林分構造の推移の解明を目的として定期的に調査が続けられており、その調査データは森林総合研究所で解析・利用されています。

今回紹介する「乗政ヒノキ人工林収穫試験地」は、岐阜森林管理署管内の岐阜県下呂市乗政、乗政国有林一二七に林小班に所在し、この国有林の一般的なヒノキ造林地を代表する林分（昭和九年植栽のヒノキ人工林）として、昭和四十年に設定されました。標高八八〇m、傾斜三十八度の西向き斜面の下部にあり、面積は一・〇九ha（うち標準地面積〇・一八ha）、現況等定期調査を六回実施。平成十五年には調査を終了し、七十年生までの生長量、林分構造の推移、施業の履歴等、調査結果の取りまとめについては、平成十六年度中部森林技術交流発表会で発表しました（取りまとめデータは森林技術センターホームページに掲載）。

このような長期にわたる試験地調査は地道な業務であり、長い年月の間には気象等の被害を受けたたり、調査や管理方法等の問題もあります。近年課題となっている地球温暖化等の環境対策の検討などには、こうした森林による固定試験地での長期間のデータ集積が重要になると考えられます。

また、森林施業に関する資料

や森林・林業に関する研究に資すること、更には、森林の役割や森林施業等のPRに活用するためにも必要であり、今後は展示林として引き続き整備し、適切な維持・管理に努めていきたいと考えています。



試験地の林内



試験地の遠景



兔岳から見た赤石岳

ふう けい き こう
風景紀行
 なん ぶ
南部
 22
 南信森林管理署
 (各署の景勝地等を紹介)

南アルプス「南部」

「南信署」風景紀行が連載され三年目を迎える今回、図らずも二回目の投稿が当署に回ってきました。時の流れの早いのに驚いています。



南アルプスの特産種タカネピランジ

この二年の間に、管内では市町村合併があり、町村数が五つ少なくなりました。南アルプスを取り巻いていた長谷村、高遠町は伊那市に、上村、南信濃村は飯田市に合併となりました。

また、最近の話題としては、南アルプスを世界遺産に登録しようとの動きが出てきております。

二月末には静岡、山梨、長野三県の世界遺産登録推進協議会が発足する模様です。

管内国有林七万二千㍍のうち四万二千㍍を占める南アルプス山系は多くの美しい山々があり、深山幽谷というにふさわしいところもいくつかあります。

前回の「巫女淵」に続き、この赤石山

脈の南部遠山谷地区について紹介させていただきます。

遠山谷を短時間で目にするには、車で飯田市上村のしらびそ高原に行くのが早いと思います。峠に出たとたんに大パノラマが広がります。

そこから徒歩四時間で尾高山風景林まで往復できます。そこでは尾根を挟んで大鹿村の谷間も見ることができ、さらにアルプスの大きさを実感できると思います。

遠山谷の主な峰を見ますと、南から、池口岳(二、三七五㍍)、加加森山(二、四一九㍍)、光岳(二、五九一㍍)、茶臼岳(二、六〇四㍍)、上河内岳(二、八〇三㍍)、前聖岳(三、〇一三㍍)、兔岳(二、八一八㍍)、大沢岳(二、八一九㍍)、奥茶臼山(二、四七三㍍)、尾高山(二、二二二㍍)といった十座前後が挙げられます。

また、このすぐ近くには赤石山脈の由来となっている有名な赤石岳(三、一二〇㍍)も控えています。

聖岳、兔岳、大沢岳の主要な山に向かう登山道は、長野側からは、これまで三ルートがありました。十八年七月豪雨のためしらびそ峠経由は不通となり、現在は、易老渡口コース、便ヶ島口コースの二ルートのみとなっています。

登山口までは飯田IC又はJR飯田駅から車で二時間程度、登山口から稜線までの所要時間は一般登山者のペースで易

老渡口コースが五時間半、便ヶ島口コースが六時間半程度となっています。

このように長野県側からのとりつきは距離が遠く、標高差を一気に稼がなければならぬため、時間と労力の面で大変きついコースとなっています。

それだけに、登山者の数も比較的小なく、自然が多く残されているのも確かです。

ただ、このところニホンジカやニホンザルが二、五〇〇㍍以上の高山帯にまで群れをなして登り、高山植物などを食べてしまう状態は、高山植物の危機ともいえる状態で早急な対策が必要です。



しらびそ高原から見た大沢岳・兔岳